

「近代熊谷と松本平蔵・松本真平」

近代の熊谷は、政治分野や産業分野、更には文化面においても様々な人物が活躍した時期である。竹井澹如や根岸武香などの国との強い繋がりを持った政治家の働きや、今年没後百年を迎える荻野吟子といった女性の社会進出の先駆け、奥原晴湖や森田恒友といった絵画分野での大いなる活躍、また農業分野においては麦王と称される権田愛三による画期的農法、鯨井勘衛による養蚕技術の伝承、鯨井治助による酪農の開拓など、日本の近代史を彩る様々な躍動を見ることができる。

熊谷宿も中山道から近代道路や公共鉄道の延伸に伴い、新たな熊谷像を模索する時期でもあった。元来活発であった農業の拡大、養蚕と製糸による近代産業、熊谷染などの工芸技術の充実化、うちわ祭や桜堤の造成に見るような町衆の連帯による熊谷的精神の構築など、明治から大正、昭和初期に渡る近代熊谷は多面的な前進を見た時期でもあった。

そのような激動の時期、熊谷を基盤に全国的な功績を残した親子がいた。すなわち、松本平蔵、真平の親子である。

松本平蔵は、嘉永 2 年 8 月に熊谷で代々米穀商の池田屋にて父丈助、母たい子の子として生まれた。幼年期は長蔵と称し、玄染堂塾に学んだ。11 歳で商業見習のため小鹿野町の常盤屋に入り、明治 12 年父の後を継ぎ平蔵を襲名した。明治 6 年入間県が廃され熊谷県設置に伴う官衙学校の誘致運動、道路開設などに積極的に参画した。

明治 39 年、熊谷製粉会社を引き受け、整理刷新規模を拡張、大正 3 年 4 月松本米穀製粉株式会社を創設した。大正 8 年、長子真平に譲った後も、社の拡大に尽力し、昭和 5 年 1 月名古屋製粉と群馬県新田製粉を合併、全国三大製粉の一つ日東製粉にまで発展させた。その間、平蔵は第 1 回町会議員に選ばれた後、37 年間の議員としての市政協力を行った。それらの中で、平蔵は社会貢献も惜しまない人物であった。その一例が、大正 2 年円照寺檀徒総代の時、大原の敷地を寄付して墓地を移転し、各寺院の墓地改編の端緒を作ったことである。明治 29 年秩父鉄道株式会社が創立され、取締役及び監査役の重職につき、私財を投じて鉄道開発に尽力した。熊谷商工会議所の前身となる熊谷商工会の設立にも大きく関わった。大正 8 年、長男の真平が後継し、大正 12 年 75 歳で没した。

松本真平は、明治 11 年 5 月 12 日、平蔵の長男として熊谷町本町に生れる。33 年 3 月東京高等商業学校を卒業し、大蔵商業学校の教諭を務めた。34 年 12 月尾張屋銀行に入行し、明治議會尋常中学校の英語教師となった。その後、38 年、秩父鉄道取締役に就任し、45 年熊谷図書館設立と同時に評議員として市の教育分野に大きく寄与し、大正 15 年、熊谷寺南側における同館の建設に 1 万円の寄付をしている。そして、産業分野への貢献について列挙すると、埼玉製麺、松本米穀、武蔵精米精麦、熊谷玉糸、熊谷銀行、北武鉄道、日本自動車、武州製氷、武州貯蓄銀行、武州瓦斯、松本米穀肥料、日東製粉、台湾紙業、日満製粉、朝鮮ドレヅジ鋳業、台湾興業、東朝鮮鋳業、有機肥料配給、全国製粉配給、熊谷航空工業、帝国車両、埼玉銀行に見るような数多くの功績を見ることができる。大正 13 年 5 月衆議院議員に当選し、昭和 7 年 9 月からは貴族院議員として国政に参画した。昭和 26 年 11 月熊谷市文化功労者として表彰され、36 年には、第 1 号の齋藤紫石に引き続き、熊谷市名誉市民第 2 号に推挙された。46 年 5 月 29 日、93 歳の高齢で逝去し、市葬が執り行われた。

松本平蔵・真平は、共に熊谷市の発展を念頭に置きながら、全国的な躍進に力を注ぎ、植民地期の台湾や朝鮮に対しても大きな影響を及ぼした。それによって出身地の熊谷の存在意義を高めた功績がある。

明治から昭和にかけて熊谷は新たな現代の世界へと足を踏み入れた。そして新たな時代、世紀へと至り、グローバル化の波の中で、熊谷は何ができるかという大きな課題と向き合うことになった。熊谷を基礎として、全国へ、更には世界へ何を投げ掛けることができるか。松本平蔵・真平氏は問い続けているように思える。

(主な参考資料：日下部朝一郎『熊谷人物事典』図書刊行会 昭和 57 年)